

代表枠が一人から二人となって戦われた初の世界選手権で、日本は10個の金メダルを獲得し、9人のチャンピオンが誕生した。

男子無差別級で久々の優勝を飾った上川大樹選手、日本女子初の二冠を達成した杉本美香選手を中心に、喜びの声を集めた。



リネール選手に攻め続けることの大切さを教えられました

無差別

上川大樹 (かみかわ・だいき/明治大3年)

初めての世界選手権。重量級、代表最後の一人として選ばれ、選ばれたからにはふがいがない試合はできないと気持ちを締めつけて試合に臨みました。特に期待が大きい階級ということもあり、「これからは柔道をやっている人だけではなく、観戦している人たちみんなが楽しめる柔道をしなければいけない。そのためには一本をとる柔道をしなければ」とも考えて畳に上がりました。

とはいえ、正直、とても緊張しました。国際大会はこれまで経験してはいますが、世界選手権はやはり他の大会と異なり、なんといっても集まってきた選手たちが強かったからです。

その象徴ともいえる存在が決勝で対決したフランスのリネール。100kg超級で3連覇を達成した世界王者が相手です。試合前は「勝てないまでも対等な試合がしたい」「気持ちだけは人一倍強く持とう」と考えました。その一方で、「自分が優勝する」とも自分に言い聞かせていました。試合では何度か体勢を崩すことはできたものの、結局、ポイントは奪えなかった。だから、ゴールデンスコアでも勝負がつかず、旗判定になったとき、自分では「リネールに上がるかな」と思いました。まさか自分に旗が揚がるとは思わなかった。でも、その結果にリネールは納得していなかったでしょう。リネールを崩したときになんとしても「有効」とっておきたかった。そうすれば誰も文句をいえなかったし、リネールも納得がいったと思います。そんなこともあって、自分ではあまり優勝の実感はなかったんですが、町中で見知らぬ人から「おめでとう」と声をかけていただいたとき、ビックリすると同時に「優勝したんだ」と実感が湧いてきました。ともあれ、後半バテてくる外国人選手が多い中、最後まで攻め続けたリネールに、「世界で勝ち続けているのはこうしたところに理由があるんだ」と改めて攻め続ける大切さを教えられました。また、表彰台にあがるのは大学に入って初めてだったので、この気持ちを忘れずにいよう、と思いました。

もう一つ、今大会で印象に残っている試合があります。鈴木桂治選手との試合です。あの試合は自分でももっとも集中していた試合だったと思います。先輩には以前、負けているので、「負けたまま引退させられない。今度こそ勝って、若手が育ってきていることを先輩に伝えたい」とそんな気持ちがあったからです。

これまでロンドン五輪に出たいという気持ちはもちろんありましたが、どこかひとりのようなところがありました。でも、今回、世界選手権はやはりオリンピックにつながる試合なのだと肌で感じ、オリンピックへの気持ちが強くなりました。ただ、今回の優勝は運が良かったからできたこと。次は実力で勝ちたい。今まで以上に練習し、気持ちも強くしていきたいと思っています。

最後に、柔道は一人ではできません。嘉納治五郎師範の教え「自他共栄」の精神をもち、感謝の気持ちをもってこれからも柔道をしていきたいと思っています。日頃お世話になっている先生方、一緒に練習してくれている学生たち、ありがとうございました。



今回の勝利は支えてくれたみなさんのおかげです

78kg超級/無差別

杉本美香 (すぎもと・みか/コマツ)

初めての世界選手権が地元日本であったことは、自分にとってとても大きな利点でした。学生時代からの友人、一緒にやってきた仲間、指導者の先生方など、たくさんの方々が応援にきてくださったからです。その目の前で自分の持っているものを出すことがこれまで応援してくださった方への恩返し。そんな強い気持ちで試合に臨むことができたからか、地元開催というプレッシャーはあまり感じることなく、最終攻める柔道を心がけることができた。

実際、試合ではいつも大きな相手と対戦するときは「何をかけたらいんだらう」と気持ちに迷いが生じるのですが、今回は違いました。「思いきりこう」「勝ちたい」という気持ちが強く、迷いはありませんでした。特に準決勝であつた劉歆選手(中国)はいつも負けている相手、本当に大きな選手ですが、この選手にも「もう勝たせたくない」「勝てる相手と思わせたくない」と強気で臨むことができた。

一方、最終日の無差別は優勝したものの内容が悪く、反省することばかりの戦いとなってしまいました。気持ち自体は超級の試合と同じように強い気持ちで臨んだのですが、どうにも体がついてこなかったのです。それでもなんとか優勝することができたことは、次につながるいい経験になったといまは考えています。

そんな今大会ですが、コンディション自体はよくありませんでした。試合1週間前に足首がロックしてしまい、打ち込みすらできない状態になってしまっていたからです。もちろんそのときは不安になりましたが、「足首くらい、すぐに治るだろう」「これくらいなんとかなる」と考えることができました。というのも、これまで両ヒザのじん帯損傷などもっと大きなケガを経験してきたからです。「もう選手としてダメなのではないか」と先が見えなくなったこともあります。それを乗り越えてきたことが今回、大きなバネになってくれました。辛かった時期を乗り越えてきて本当に良かった。

それらの日々を乗り越えられたのも、応援してくださったみなさんのおかげです。だから、今回はみなさんのおかげで得られた勝利だと思っています。本来であれば一人ひとりにお礼を言いたいところですが、この場をお借りして伝えさせていただきます。本当にありがとうございました。特に、ケガで気持ちが荒れていたとき、黙って自分のいらだちを受け止め、支えてくれた家族に心から感謝しています。

また、「柔道はスポーツとは違う。相手がいるからこそできるもの。対戦相手には感謝の気持ちを持ち、決してガッツポーズはするな」と教えてくださった高校時代の先生にも感謝です。この教えをこれからも守り、これからも成長していきたい。塚田真希先輩が引退され、これから自分が引退する頃には、自分も引退していかなくちゃいけないが、それをプレッシャーに感じることなく、もっともっと上を目指し、技も、肉體も精神力を強くなって、世界に臨みたいと思います。

INTERVIEW

66kg級

森下純平 (もりした・じゅんぺい/筑波大2年)

大会終了後、家族・友人・関係者をはじめ、たくさんの方から「おめでとう」と祝福の言葉をいただきました。その中でもっとも印象に残っているのは、「君の姿に勇気もらった」「勝った姿を見て、元気が出てきた」というコメントや、最後に決まって「ありがとう」と言われたことでした。

自分の勝利が、周囲の方々に元気や勇気を与えることができたことに気づかせてもらったのは、大きな収穫でした。今後、さらに皆さんに元気や勇気を出してもらえよう、来年の世界選手権と再来年のロンドン五輪も金メダルを目指して頑張ります。



73kg級

秋本啓之 (あきもと・ひろゆき/了徳寺学園職)

今回の金メダルの獲得は、大きな自信になりました。世界チャンピオンとして見られることで、自覚を持って行動・言動を意識するきっかけにもなりました。

また、試合終了後に海外メディアの方に「決勝で勝った後、ガッツポーズなどをして喜ばなかったのは武道の精神からですか?」という質問があり、世界の人は柔道の本質についても注目しているということも知ることができました。そういったことも大切にしながら、ロンドン五輪での金メダル獲得に向けて頑張ります。



100kg級

穴井隆将 (あない・たかまさ/天理大職)

昨年の悔しさもあり、大会初日もあったので優勝できてホッとしています。昨年の世界選手権は初出場で、勢いだけで戦っていた面がありますが、今回は冷静に判断し、試合運びができたと思います。結果がほしかったので、勝ちにこだわって戦うことができました。特に印象に残る試合は、準決勝戦かな。有効を取られましたが冷静に落ち着いて、ゴールデンスコアに入ってもスタミナが切れずに一本で勝つのは、気持ちも前に出ていたのでしょう。

子どもが生まれたことで力にもなりましたが、まずは自分のために勝ち、その結果がついて子どもも喜んでくれたらいいなと思いました。今回は、日本開催ということで、沢山の応援が力になりました。一人だけの勝利ではないと感じ、多くの方にありがとうという感謝の気持ちで一杯です。

この大会も含めロンドンオリンピックのための大会になります。一つ一つの大会、試合があるので大事に戦っていききたいと思います。

48kg級

浅見八瑠奈 (あさみ・はるな/山梨学院大4年)

今大会では5分間攻め続けることと、ケンカ四つへの対処を課題にして試合に臨みました。特に印象に残っているのは、2回戦と決勝戦です。2回戦のラトリッペ(カナダ)に先にポイントをとられながら、残り時間30秒で決めることができたのですが、このときはどうしよう、まずいって思いましたね。

これまで国際大会で勝っても評価していただくことはできませんでした。今回、代表に選ばれ、優勝できたことでようやく福見選手、山岸選手と同じ位置にたてたと思っています。次の世界戦はもちろん、ロンドンまですべての大会で優勝し、攻め続ける柔道でオリンピックを狙います。応援してくれたみなさん、みなさんの応援があるから頑張れます。これからもよろしくお願ひします。



52kg級

西田優香 (にしだ・ゆか/了徳寺学園職)

今大会はコンディショニングも非常にうまくいき、ほどよい緊張感で、頭は冷静、体は動く、いまの自分の実力ではベストな試合ができたと思っています。その勝因は2番手という立場で出場する悔しさと、ここで負けてしまったらロンドンはないという思いです。これまで中村美里選手の評価が高く、2番手の自分にはもうダメなのではないかというネガティブな考えに陥っていたのですが、この大会で「自分だってできるんだっていうところを見せたい」という強い気持ちで試合に臨んだことがよかったのだと思っています。この勝利で自分をもう一度信じられるようになりました。

これから厳しい戦いが続きます。なんとしてでも競り勝って、ロンドンの代表の座をつかみたいと思います。

57kg級

松本 薫 (まつもと・かおり/フォーリーフジャパン)

金メダリストになったといっても、周囲や自分自身に変化はありません(笑)。昨年初めて代表となり世界で戦いましたが、途中で骨折をしてしまいました。でも痛いと言っていたら、無我夢中で試合をしたのですが結果が残せずに悔しい思いをしました。ただ勝ちたい、勝ちたいと言っているだけでは勝てないんだと痛感しました。そんな思いもあり、今回は自分自身を客観的にみることができ、落ち着いて試合をすることができました。技術的にはまだまだ課題も多いですが、自分の柔道というものを貫けたと思います。試合会場で見つけた応援メッセージに、「松本選手の柔道が良い」と書かれたのを発見しました。自分の柔道を褒められたことがないので、そのメッセージをみて、本当に嬉しかったです。

最終目標はオリンピックでの金メダルですが、そのためにも一つ一つの試合で成績を残していきたいです。

63kg級

上野順恵 (うえの・よしえ/三井住友海上)

今大会は自分で自分自身を苦しめた大会となりました。予想はしていましたが、世界から研究されていることを肌で感じ、改めて「今までと同じ柔道をしては勝てない」ということを体感しました。本当に苦しい大会でした。

特に印象に残っているのはやはり決勝戦です。準決勝で首を痛めてしまい、決勝戦は手と首のしびれを感じながら、気持ちだけで戦いました。勝つことができたのは世界選手権2連覇への強い気持ち。その勝利への執念が最後の粘りにつながったのだと思います。

ロンドンまではたくさん試合があります。一つひとつ勝つことはもちろん大切ですが、体のケアをしっかりと行い、ベテランらしい柔道を見せられるようこれから頑張っていきたいと思っています。